

韓国・第五共和国時代における全斗煥の功罪：「悪人」と「悪役」のはざまで生みだされた発展

著者名(日)	林 史樹
雑誌名	Global communication studies = グローバル・コミュニケーション研究
巻	1
ページ	113-134
発行年	2014-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001205/

韓国・第五共和国時代における全斗煥の功罪
——「悪人」と「悪役」のはざままで
生みだされた発展——

林 史 樹

Role of CHUN, Doo-hwan in
the fifth Republic era, South Korea:
Development Produced Between
the “Villain” and “Villain’s Role”

HAYASHI Fumiki

In South Korea, the fifth Republic era (1981–1988) by the CHUN, Doo-hwan regime, is the military regime following the PARK, Jeong-hui regime which is described as a dark age in one side of the high economic growth. And, In this regime, only fraud and bribery stood out without a special economic growth. Though PARK, Jeong-hui did not give special interests to his relatives, CHUN, Doo-hwan caused the big scandal to divert large sums of money to his relatives. In addition, when CHUN, Doo-hwan took the political power to mobilize the military in the same way the previous regime, though PARK, Jeong-hui accomplished a bloodless coup, CHUN, Doo-hwan was caused to a citizens massacre in Gwangju. For all of these reasons, CHUN, Doo-hwan always have the image as a “villain”. However, while South Korea society has a lot of problems, in this fifth Republic era, the Korean people have benefited from the wealth, and began to have an interest in a variety of cultural content. In this paper, while focusing on one person that CHUN, Doo-hwan, I consider the fifth republic from the side of the positive and negative.

キーワード： 全斗煥、第五共和国、韓国、悪役

1. 全斗煥 (CHUN, Doo-hwan) のイメージ

全斗煥に関するある文献のなかに「1人を殺せば殺人であるが、1000人を殺せば将軍になる。人のものを盗めばドロボーであるが、国を盗めば英雄である」という言説がでてくる(池東旭、1988: 110)。多分に含蓄のある言説であるが、韓国の人々の間でも、殊のほか全斗煥の評判は悪い。まさに2013年現在も、大統領在任中に起きたという贈収賄事件で、一族ぐるみで多額の返済を迫られ、それが連日、韓国のニュースとなっている。これだけでも「悪人」という評価を受けるのに十分といえるかもしれない。

そのほかに全斗煥がとった行為をみても、朴正熙 (PARK, Jeong-hui) の死後に、軍事クーデターによって軍部内での地位を高め、「ソウルの春」と呼ばれた民主主義への気運を「光州事件」と呼ばれる市民虐殺で封じ込めた。大統領の座に就いた後も、言論統制を徹底させて権力の集中を図り、身内をさまざまなポストに就かせた。これらの経歴をみるかぎり、確かにこれほど「悪人」が似合う人物はいないかもしれない。全斗煥の故郷である陝川郡でも、彼に対して批判的な態度をとる人も少なくない。

しかし一方で、賛否両論があったものの彼の号である日海を冠した日海公園が陝川郡につくられ、生家も整備されている。一国の大統領まで務めた人物の記念館がないのは理解できないと、記念施設の計画も一部でできている。悪いこともしたが、基本的に国民を飢えさせなかったのは彼の業績であり、多少の賄賂は仕方ないという意見もある。これは同郷人であったためともいえるが、果たして今日、一般に語られている全斗煥の「悪人」像はどれほど当人を言い当てているのだろうか。全斗煥政権であった第五共和国は傍若無人にふるまう「悪人」に振りまわされるだけの時代であったのだろうか。

本稿では、人類学者のクリフォード・ギアツ (Clifford Geertz) が呈示する「劇場国家」からヒントを得て「演じる」という観点から全斗煥の行動を考えてみたい。その意味で、仮に全斗煥自身が「悪人」というよりも「悪役」を演じていたとすれば、韓国の人々は彼に何を投影していたのか、それについても検討したい。

ここで韓国の元大統領、全斗煥について検討を加える前に断っておかな

ければならないのは、まだ本人が健在ということである。登場する人物の大半も年配ながら健在である。故人に対しての見解さえ多岐に分かれるのに、まだ健在の人物については、今後も評価が変わりやすいだけに慎重にならざるをえない。

また、指導者にはそれなりの苦労があるといえば、非指導者のなかでも報われぬ苦労を強いられてきた人々に叱責を受けるだろうか。良くも悪くも強烈なイメージを韓国の人々に植えつけた朴正熙の後に、指導者となった全斗煥には、本人以外には口にできない精神的圧力があったと思われる。朴正熙は独裁政権をしき、有無をいわせないほどの強い政治力と個性で、国家を発展途上国へと一気に向上させ、国民を豊かにした。全斗煥の後に続く盧泰愚（NOH, Tae-woo）は、「普通の人」であることを強調し、青瓦台（大統領府）の一般公開に踏みきるなど、これまでの政権に続く独裁的イメージの払拭を図った。そして何よりも、本人の意図と関係なく、金泳三（KIM, Young-sam）による文民政権へつなぐ移行期と捉えられている。盧泰愚政権はそれほど独自性が強かったといえないが、韓国の政治から長年の軍人色を消すきっかけになったともいえる。全斗煥政権はちょうどその端境期にあたるが、一般に朴正熙政権を引き継いで軍事独裁政権を行ったというイメージが強く残っている。

本稿では、全斗煥の半生と功罪を振り返りながら、韓国の1980年代をみつめなおす。そして、人々がある役割を演じること、あるいはある役割を仕立てることといった観点からも全斗煥と当時の社会をみていきたい。

2. 誕生から青少年期

1931年1月23日、全斗煥は慶尚南道陝川郡栗谷面内川里の貧しい農家に誕生した。内川里は洛東江の支流、黄江が大きく蛇行した場所に50戸ほどが集まり住む片田舎であった。父は完山全氏の全相禹（CHUN, Sang-wu）、母は光山金氏の金点文（KIM, Jeom-mun）である。長女烈鶴（CHUN, Yeol-hak）が誕生した後、全烈煥（CHUN, Yeol-hwan）、全圭坤（CHUN, Kyu-gon）と男児が2人生まれたが、不慮の事故で相次いで亡くした。とくに彼女の責任でなかったにもかかわらず、婚家からつらくあた

られ、その後も全善鶴(CHUN, Seon-hak)、全明烈(CHUN, Myeong-yeol)と女兒が続いたため、居づらい思いをしたようである。そのなかで生まれたのが全基煥(CHUN, Ki-hwan)であり、全斗煥であった。その後、に女兒が2人生まれるが1人が死亡し、残ったのが全点鶴(CHUN, Jeom-hak)である。そして、最後に全敬煥(CHUN, Kyeong-hwan)が誕生する。したがって、全斗煥は10人兄妹の7番目で4男となる¹⁾。

全斗煥が幼い頃、自宅では叔父、全相希(CHUN, Sang-hee)が「千字文」や「啓蒙編」を手解きしていたらしい。村にも書院はあったが、適当な先生がおらず、門を閉めていた。地域共同体内での教育機関とは別に、この頃にはすでに学校教育が導入されており、2歳上の兄・全基煥は普通学校に通っていた。全斗煥は、この兄といつも一緒に行動をしていたためか、負けず嫌いな性格であった。

父・全相禹は農業を営んでおり、その村落の長をしていた。反骨精神の持ち主でもあったようである。当時の権力に迎合しなかったため、日本人巡査から付けねらわれており、土地抵当権が絡んだ諍いをきっかけに故郷を離れた。

1940年に中国吉林省盤石県に一家で移り、呼蘭普通学校に入学する。当時、満州と朝鮮半島を往来する人々は多く、移住先の村にも中国人と朝鮮人が住んでいた。しかし、そこは風紀が乱れており、生活に不安を感じたことを理由に、故郷の近くに帰ることにした。

1941年に中国をでて大邱府内堂洞に戻り、父は中国で得た漢方の知識をもとに薬局を開く(千金成, 1981: 59)。当時は物資が不足しており、満身に学校教育を受けられなかったが、そのような児童を受け入れていたのが金剛学院であった。当時、仏教系の布教団体が各地で学校を開いており、金剛学院もこうした学校の1つであったと思われる。ともあれ、全斗煥は新聞配達のアリバイトをしながら通学した。そして、その金剛学院を経て、1944年に喜道国民学校(現: 大邱鍾路初等学校)4年に編入する。1945年の日本敗戦にともなう祖国の独立解放は、国民学校5年で迎えた。1900年に創立されたこのキリスト教系学校は、子どもたちの憧れであった。全斗煥はとくに体育が得意で、サッカー選手として大邱市内の大会で活躍し

た。

1947年に6年制の大邱公立工業中学校（現大邱工業高校）機械科に入学する。学校の1年先輩には1つ年下で後に慶北中学校に転校し、陸軍士官学校で同期となる盧泰愚がいた。中学校時代の全斗煥は、最初はボクシングに明け暮れていたが、その後はサッカーに熱中する。成績はそれほどよくなかったようであるが、友人とのつきあいには長けており、常にリーダー格であった。

3. 軍人としての全斗煥

全斗煥は朝鮮戦争が膠着状態にあった1951年10月に募集がでた陸軍士官学校に応募し、合格する。京畿道泰陵にあった陸軍士官学校は警備士官学校が前身であったが、それまでは短期間で軍人養成をしてきたため、より本格的な正規4年制の軍人教育機関を目指して慶尚南道鎮海に新たに設立されたのである。教官選定のために予定より開校が遅れたが、李承晩（LEE, Seung-man）が待望していた学校である。これまでの養成機関としての名称は引き継いだため、彼らは陸軍士官学校11期生となるが、カリキュラム編成は、アメリカ陸軍士官学校の制度を踏襲したウエストポイント式で行われた。そのため、旧陸軍士官学校の伝統を受け継ぎながらも、11期生は正規教育を受けた1期生としての誇りが高く、団結心が強かった。休戦の翌年1954年6月に陸軍士官学校は、再び京畿道泰陵に移された。

11期生（正規1期生）としては228名が入学し、1955年に156名が卒業した。全斗煥は1955年9月に陸軍士官学校を卒業し、少尉に任官された。そして、光州にある陸軍歩兵学校初等軍事班を経て、陸軍第21師団に配属された。当時は、不正が横行し、また部隊によっては新任少尉よりも軍曹や曹長といった古参の下士官たちが幅をきかせていた。そこで、全斗煥は陸軍士官学校時代の名譽制度を適用した。「嘘をつかない、他人をだまさない、盗まない」が原則で、他の者がこれを犯しているのを見過ぎたら、それも同罪とする制度である。全斗煥は、これに「物を欲しがらない」を加え、戒律で部隊を統制しようとした。全斗煥は、とかく原則にこだわっ

たため、「原則将校」と呼ばれた(千金成、1981: 147)。要領がまかり通っていた軍に規律を取り入れるのが目的であった。

第21師団66連隊第1中隊の小隊長から中尉に進級し、師団作戦参謀部の作戦将校、陸軍歩兵学校学生連隊の区隊長を経て、第25師団72連隊第7中隊中隊長になった。

この頃から全斗煥は、後に妻となる李順子(LEE, Soon-ja)と交際を始め、李順子の両親にも挨拶をした。給料は貧しく、映画が彼らの唯一の娯楽であった。李順子の父は李圭東(LEE, Kyu-dong)で、星州李氏の家柄である。第5代大統領となる朴正熙と同期の陸軍士官学校第2期出身で、韓国軍創設メンバーの1人でもある。後に陸軍准将となる高級将校である。李順子も全斗煥と同門となる大邱の喜道国民学校を1952年に卒業後、京畿女子中学校に進学した。しかし、父の転任にともなって何度も中学校を転校したため、成績はそれほどよくなかったようである。

実は、李順子は鎮海女子中学のときに、当時大佐として陸軍士官学校の参謀長を務めていた父を訪問していた全斗煥に会ったことがある。その後、京畿女子高校に進学し、全斗煥が中尉となったときに再会したのである。男児を授からなかった李順子の母も陸軍士官学校当時の全斗煥を可愛がっていたらしく、2人の距離も縮まっていったらしい。その後、李順子は1958年に梨花女子大学医学部に進学したが、部隊の中隊長になっていた全斗煥は自らの経済力のなさから李順子と距離を置くようになっていた。ところが、李圭東が第2軍事司令部管理部長として大邱に転任し、李順子だけがソウルに残っていた1958年夏に李順子は急性盲腸炎を患って入院する。そのとき、全斗煥は部隊から病床に駆けつけて付き添ったという。

当時の全斗煥は、李順子の友人たちから「Maybeさん」と呼ばれるほど(千金成、1981: 159)、曖昧な回答を繰り返していたらしい。気恥ずかしさのためと思われるが、このような挿話からは、堅苦しい軍人というより、愛嬌のある青年を感じさせる。これを優柔不断と受けとることもできようが、全斗煥は一般に周囲によく配慮したといわれ、好感をもって受けとられていたと思われる。

1958年12月には大尉となり、陸軍第1戦闘団(後の金浦第1空輸特戦隊)が創立したときに教育将校として抜擢された。1959年1月、金浦空輸部隊に転属していたときに結婚する。全斗煥は貧しさからアメリカに留学を考えており、李順子は同じく貧しさから脱却する1つの手段として医学部に進学していた。それでも、全斗煥が留学する前に婚姻をすませたく思い、李順子が結婚を急いだ。一方、全斗煥は一時期、結婚をあきらめていたこともあり、結婚後も常に家柄を卑下していたようである。梨花女子大では既婚者の在学が許されなかったため、李順子は大学を中退して結婚に望んだ。新婚旅行は慶州に行った。李順子は料理学校も修了していた。また編み物もできたし、美容師の資格もっていた。全斗煥が後に中佐になり自宅をもつまでの8年間は、生活が苦しく、李順子が美容院を経営したり、編み物をしたり、内職で生計を支えた。

1959年1月に陸軍副官学校第46期軍事英語班に入学し、4ヶ月半にわたり、軍事英語を履修する。その後、第1空輸特戦団の将校として軍に復帰した。1959年6月にアメリカ留学の機会が訪れた。現在も対テロ部隊デルタ・フォースで有名なノースカロライナ(North Carolina)州フォート・ブラッグ(Fort Bragg)基地のアメリカ陸軍特殊戦学校で心理戦を専攻し、5ヶ月の教育を終えて帰国する。帰国後は、第1空輸特戦団作戦課主任補佐官になり、間もなく作戦参謀になる。また、1960年3月には米韓合同軍事訓練で沖縄にいた。そして、レンジャー訓練のため、韓国最初の留学生派遣計画の派遣将校として抜擢され、2日間の日本滞在を経て再びアメリカに飛んだ。これまで日本にまったく関心がなかったわけではないが、このわずかな滞在が日本への関心を膨らませたともいわれる。

1960年6月に全斗煥は、レンジャー連隊で有名なジョージア(Georgia)州フォート・ベニング(Fort Benning)基地の陸軍歩兵学校で遊撃訓練を受けた。当時は、後に朴正熙政権下で大統領警護室長にまで出世する車智澈(CHA, Ji-cheol)なども大尉として留学していた。歩兵学校での基礎訓練後はフロリダ(Florida)に移り、アフリカ奥地やベトナム密林などでのジャングル戦を想定した沼地訓練を行う。その後は、ニュージャージー(New Jersey)州での山岳訓練に移り、最後は生存訓練で不毛の地で食糧を

確保しながらの訓練を行った。この約8週間にわたる訓練の末に4週間にわたって敵地への落下訓練を行う過酷な訓練を受けたことは、軍人として名誉であり、とくにアメリカ軍人に対するときは相手に自分を認めさせる材料となった。

また合計約6ヶ月ほどのアメリカ体験が、全斗煥に義務と権利を混同しない民主主義精神を植えつけた。国家が形成されて日が浅く、不正が横行する韓国と自然と比較された。

1960年12月に帰国し、第1空輸特戦団の将校として勤務した後、1961年4月に陸軍本部特戦監室企画課長代理に任命された。その後、予備将校訓練団(ROTC)²⁾の準備委員となり、ソウル大学文理学院の教官に任命された。全斗煥が感情的に南北文化交流を要求する学生に不安を感じた一方、当時の張勉(CHANG, Myeon)政権は学生が北朝鮮の学生との連隊を計ろうとデモをしていても、それを収拾できないほど、消極的な対応しかできなかった。

この頃、軍事革命が切迫していることを知り、義父・李圭東と同期であった朴正熙に面会する。朴正熙については「清廉潔白な軍人で、部下の尊敬を一身に受けていた」ことをただ噂に聞いていた。その朴正熙との接点に関しては、一説によると朴正熙の革命後に全斗煥自身が発案し、11期生の立場とソウル大学のROTC教官の立場を利用して、陸軍士官学校の生徒や各大学の学生による革命政権支持の行進を主導し、朴正熙に認められたのが最初とされる。ただし、これは当時空挺団中隊長として軍事クーデターに参加した車智澈の指示によるともいわれる。いずれにせよ、この頃には陸軍士官学校の人脈を掌握していたことに変わりなく、全斗煥の人間関係づくりの巧みさがうかがわれる。

革命政府に国家再建最高会議が改編されたとき、1961年9月に最高会議議長室民願(国民サービス)秘書官となる。当時、全斗煥は大尉であったが、このポストは大佐クラスのもので、出世が早く、まさに軍人エリートであった。

その後、陸軍歩兵学校高等軍事班第106期生として光州の尚武台に行き、教育修了後、1963年1月には中央情報部第7局人事課長となり、その

半年後に少佐に昇級して陸軍本部人事参謀部に移った。それから陸軍大学に入学し、修了後は第1空輸特戦団に配属された。再び軍隊に戻ったのである。1965年に第1空輸特戦団大隊長代理となった。その後1年も立っていない1966年3月に父が69歳で他界した。

その後も彼は出世を続けた。1966年11月に中佐に昇進し、第1空輸特戦団副団長となった。そして、それと同時にソウル市普光洞に自宅をもち、妻の実家での間借り生活から独立した。全斗煥には、長男・宰国、長女・孝善、次男・宰庸、三男・宰満が生まれていた。

1967年8月に首都警備司令部第30大隊の大隊長となった。この頃、全斗煥はベトナムと西ドイツを視察する機会を得ている。1969年4月に陸軍士官学校第11期生以降の同窓会組織である「北極星会」の会長となったことは、当時の全斗煥がそれだけの実績をもち、人望に厚かったことを意味している。1969年11月に大佐に昇進し、同年12月に参謀総長室主席副官に転任した。大佐昇進は、陸士同期生のうちでトップであった。このような昇進の影には当時の朴正熙政権下で権力を誇っていた李厚洛(LEE, Fu-rak)や尹必鏞(YUN, Pil-yong)、朴鐘圭(PARK, Jong-gyu)、車智澈などの推薦があったからといわれ、とくに朴正熙政権下で強大な勢力を誇った尹必鏞との関係は密であったといわれる。

1970年11月に、全斗煥は連隊長としてベトナム戦争では陸軍歩兵第9師団、白馬部隊の隊長として参戦した。1971年1月から「梟25号作戦」が計画され、全斗煥が率いる白馬部隊第29連隊は「梟部隊」で通っていた。梟部隊は、空挺特戦隊の主要任務である奇襲部隊であった。作戦は成功を収め、1971年6月からは「梟26号作戦」が展開された。結果、花郎武功勲章と忠武武功勲章に続き、作戦の武勲によって全斗煥に乙支武功勲章が授与された。1971年11月に帰国し、第1空輸特戦団団長になる。全斗煥は軍部においても中枢の事務官としてより、実動部隊との関わりが強かったが、とくにこの空輸特戦団と縁が深かった。

1973年に陸軍准将に昇進し、1976年6月に大統領警護室次長補に就任した。1977年2月に少将に昇進した。1978年1月に陸軍歩兵第1師団長に内定した。師団内では軍人精神をもった者に表彰と休暇を与えるなど、

鉛とムチの使い分けがうまかった。最前線の巡視も頻繁に行うことで、勤務兵は緊張感を覚えると同時に感激するため、職務を熱心に遂行し、一層忠誠を尽くすようになった。師団のスポーツ選手をねぎらったり、部隊の炊事場をのぞいたり、訪ねてきた将校の妻にも配慮するなど、部下にも気遣いをした。

ただ、不幸もあった。1978年4月に母が81歳で他界したのである。それは全斗煥が実権を掌握するちょうど2年前のことであった。

4. 軍事クーデター、光州事件、そして不正事件

1979年3月、全斗煥は第1師団長から国軍保安司令官に任命される。これは朴正熙自身がそのように望んだためともいわれる。また、全斗煥も「韓国人の精神的遺産は忠義礼孝と考える」という朴正熙の考え方に心酔していたようである。

そんな全斗煥にとって大きな転機が訪れたのが、1979年10月26日に起きた朴正熙大統領殺害事件であった。朴正熙の腹心の部下である金載圭(KIM, Jae-gyu)が同僚の車智澈との確執をめぐって宴席で発砲し、同席していた朴正熙まで殺害した事件である。このとき、全斗煥は大統領殺害事件合同捜査本部長に任命された。これによって、彼は軍部の情報を掌握することができ、中央の舞台に躍りでていく。そして、それは同時に全斗煥が「悪人」という道に進んでいく過程でもあった。

合同捜査本部長となった全斗煥は、早速に陸軍参謀総長であった鄭昇和(CHUNG, Seung-hwa)を逮捕する。これは朴正熙暗殺事件の際、鄭昇和が首謀者である金載圭から多額の金品を受け取っていたことや、事件直後に金載圭が鄭昇和と自動車で国防部に向かっていたことから事件と密接に関わっていると、逮捕に踏み切ったとされる。しかし、同時に全斗煥が自らの政権を掌握するための足固めであったともいわれている。さらに、要人の逮捕に際して、北朝鮮の備えとして配備していた第1軍第20師団や第3軍第9師団のほか、首都警備軍や特戦団空挺部隊などを動員し、銃撃戦まで起こしている。それも、鄭昇和といえば、全斗煥の上司に当たる人物であり、明らかに軍紀違反である。そこで、この事件は、その日付を

とって「12・12クーデター」と呼ばれる。

12・12クーデターの背景もさまざまに解釈されるが、この真相は、全斗煥が陸士正規1期生（11期生）たちは自らの軍人としての自尊心と権益に固執していたのに対し、参謀総長であった鄭昇和が維新体制をやめて民主主義に戻る考えをもっており、そのため国民的な流れとしては民主化促進と維新体制の打破に向けられていたことによるようである。ただ、クーデターがアメリカ国防総省や在韓米軍司令官に了解なしに成功しなかったともいわれており、アメリカが背後で全斗煥のクーデターを望んでいたという指摘もある。

実権を握った全斗煥は、朴正熙が大統領に就任するまでの階梯を踏襲する。まず、クーデター後に自らを中將に昇級させる。1980年4月に全斗煥を中央情報部長代理に任命する。そして最後には、1980年8月に大將に昇級させ、軍部の統括を確固たるものにした。

これと同時に標的は政界にも向けられる。1980年5月17日、申鉉碯（SHIN, Hyeon-hwak）首相の名で閣議が開かれ、非常戒厳令を大統領の名で公布し、言論・集会・結社・デモ・職場離脱・ストライキなどの禁止に加え、一切の政治活動、冠婚葬祭などの非政治的な集會での政治的発言、前・現大統領の誹謗などを禁止した。同時に金大中（KIM, Dae-jung）、金泳三をはじめ、反政府とみなされた人物を逮捕・軟禁した。これは全斗煥が起こした第2のクーデターといわれる。

ところが、これに対して1980年5月18日に光州市の全南大学や朝鮮大学で学生たちが中心となって非常戒厳令反対と金大中の釈放を求める大規模なデモを行った。それに呼応して、全斗煥は特殊部隊特戦団3000人を送り込み、無差別虐殺を行ったのが、有名な「光州事件」である。軍部による「鎮圧」は10日間にわたって行われ、軍部公表で174人、一般にいわれているところで2000人から3000人の市民の命が奪われた。

この光州事件を期に「ソウルの春」といわれる民主化への機運は完全に踏みにじられ、軍事独裁政権に戻ったため、全斗煥は韓国から民主化を奪った張本人とされる。この後、1980年5月31日に国家保衛非常対策委員会を緊急に発足させた。委員長には大統領の崔圭夏（CHOI, Gyu-ha）を

おいているが、実権は同時に設けられた常任委員会が握っており、その委員長には全斗煥自身が就任する完全な軍政機関であった。

その後、現職大統領であった崔圭夏を辞任させ、アメリカの支持を受けて1980年9月に全斗煥が第11代大統領に就任する。しかし、そのとき維新憲法をあまり改変しないで継承した。つまり、大統領に権力が集中する仕組みに則ったのである。

1980年12月には中央情報部を国家安全企画部と名称変更すると同時に、組織の改編を行った。これによってイメージの一新を図るのが狙いであったが、実質的に大きな変化がなく、全斗煥政権は軍事独裁政権の色彩を強めていったのである。

1981年2月、軍事クーデターから大統領になったことを正当化するため、名目上の大統領選挙を行った。名目上としたのは、實際上対抗馬がでられないように工作した状態での選挙であったためである。1981年3月、全斗煥は新憲法下で第12代大統領に就任した。

就任後は政権のイメージ向上につとめたが、全斗煥の身边から不正事件が次々と露呈する。まず、朴正熙政権末期から国民レベルでの不景気が続く折に、アメリカからのコメ輸入において協定価格と国際価格の差額を、全斗煥が賄賂として受け取った疑惑がでた。

さらに、全斗煥の親戚筋による巨額の不正事件が追い打ちをかけた。1982年、韓国手形詐欺事件の主犯となった女性実業家の張玲子(CHANG, Yeong-ja)、元中央情報部次長の李哲照(LEE, Cheol-jo)夫妻が逮捕された。張玲子は、全斗煥と姻戚関係にあたる前大韓鉅業振興公社社長の李圭光(LEE, Gyu-gwang)の夫人と姉妹であり、李圭光も同時に収賄罪に問われた。先の2人が設立した金融会社大和産業を足場に企業や銀行に手形を振りださせ換金したうち、1476億ウォン(約147億円)が用途不明になったのである。これらに関しては全斗煥とその親族が関わった権力がらみの事件という疑惑が強まった。

ついで、1983年には義父・李圭東と親交がある明星グループ会長が無担保で銀行から巨額の資金を借りだしていた事件が明るみにでた。同じことは朝興銀行でもおきたが、このときには李順子の名がでた。

実弟の全敬煥は、1985年2月にセマウル運動中央本部会長に選出され、1987年2月に辞任するまでに多額の不正を行った。1985年の1年だけでも170億ウォン（約17億円）の不正を行ったといわれる。

韓国労働組合総連盟が1984年5月にまとめた調査では最低生活費が1人16万3200ウォン（当時で約5万4000円）であったのに対し、20万ウォン以下の労働者が47.2%を占めるほど、労働者層の低賃金は深刻化していた。100億ウォンを超える不正事件が当時に起こったことを考えると、いかに不正が甚だしかったかがわかる（萩原、1986:219）。

1980年代は学生や労働者が各地で民主化を求めてデモを繰り返した民主化運動の時代としても知られる。維新憲法の延長といわれた憲法改正に対しても、1986年2月にソウル大学で起こったデモが各地に広がった。デモは単なる労働者の待遇改善や憲法改正反対だけにとどまるものでなく、先述したさまざまな不満が噴出したものといえる。1987年6月、全斗煥は大統領の直接選挙制改憲と民主化を求める国民運動に直面し、次期大統領候補である盧泰愚に譲って退陣を余儀なくされた。

その後、全斗煥は、退任後も院政を考えたが盧泰愚の思惑と重ならなかったため、不正事件をはじめ、光州事件などの責任が野党により追及された。そして、ついに1988年11月に現金139億ウォンを献納し、江原道にある百潭寺に隠遁した。

5. 第5共和国という時代

以上のように全斗煥は評価を落としていったが、果たしてそのようにだけ全斗煥を評価してよいのだろうか。次に全斗煥が政権をとってつくった第5共和国、すなわち韓国の1980年代を別の視点から眺めてみる。

一部に、第5共和国は「開発独裁の稚拙な模倣作で、亜流にすぎなかった」（池東旭、2002: 160）という見方がある。あらゆる面で朴正熙政権の手法を踏襲したというのである。それはクーデター以降の軍部を掌握の仕方、政界への進出から大統領就任への階梯、日本の経済協力を導入して経済開発に活用するなどである。

しかし、決してそれだけでなかったように思われる。その一方で、全斗

煥は積極的な多方位外交を展開した。嫌韓派のカーター (James Earl Carter) がアメリカ大統領を退任し、1981年にレーガン (Ronald Reagan) が引き継いだことで韓米関係が修復された。そして、アメリカ製の武器購入と核開発放棄などを約束し、アメリカを通じてオリンピック誘致や、1985年のIMF総会のソウル開催など、世界の舞台に韓国が飛躍していく土台をつくった。

また、対日関係も進展した。日本では、1982年に中曽根康弘が総理大臣となった。そして経済協力で40億ドルという巨額の支援を取りつけることができ、日韓関係が好転したことで首脳が相互に相手国を訪問した。中曽根が1983年1月に訪韓し、全斗煥が1984年9月に公式に来日する。韓国の国家元首として初めて公式的に訪日し、昭和天皇が過去について遺憾であったと表明した。このときの「謝罪」は釈然としたものでなかったが、日韓関係を一步前進させ、同時に日本のなかでも戦時のできごとを目を向ける風潮が高まった。

全斗煥は、東南アジアでの地位を高めるためにも外遊を行うなど、対外政策に長けていた。とくに積極的に「南南外交」を目指していった。これまでの先進諸国が南の「遅れた」途上国を支援するという構図から抜けだし、途上国同士の外交を通じて互いに協力していこうという考え方で、1983年から東南アジア諸国を歴訪する計画を立てるなどした。また、国内からこれらの諸国に多くの専門技術者を派遣すると同時に多くの技術者を招待し、受け入れた。その結果、マレーシアが打ちだした「ルック・イースト政策」のモデルが日本・韓国・台湾であったように、東南アジアにおいて韓国の地位を大いに高めた。

さらに、もう少し第5共和国を肯定的にみていくことにしたい。まず、一言でいえば、朴正熙政権時代の禁欲的な勤労が奨励された時代から、大きく現代に向かった時代といえる。たとえば、これまでキムチは各家庭で漬けていたのが、急増した小売店などを通して購入するものに変化し始めたし、外食産業が盛んになったのも1980年代である。たかが料理であるが、従来の家庭内における男女の役割分担や伝統的な価値観を徐々に転換させる契機となった。経済指標にはみえない人々の意識変化が起きた時代

であったともいえる。

また、1980年からカラーテレビが放送されるようになり、人々がより色を意識し、娯楽が多様化していく効果を高めた。1960年代の東京オリンピックを契機に日本でカラーテレビが普及したように、1980年代のソウルオリンピックを契機に韓国でカラーテレビが普及していく。それは豊かさの象徴として人々の意識を変えていった。全斗煥もこの動きに巧みに乗った。彼は朴正熙時代と比べ、衣装にとっても神経をつかい、ベージュ色の服を着てブラウン管に登場するイメージがもたれている。朴正熙が軍服あるいは地味な紺色の服を着用したのとは対比的に色を意識しており、質素儉約を象徴した朴正熙の衣装に対し、全斗煥の衣装は明らかに豊かな社会への前進を意味していた。

このことと呼応して、一般の人々のファッションに対する意識も変化する。1980年代はファッション・ショーや展示会などが開かれ、「アンアン」や「ノンノ」といった日本語ファッション雑誌が流行った時代として知られる。また1980年代は国家的スポーツ大会が続いたことでスポーツウェアにも関心が高まった。これらはカラー化がもたらした社会現象といえ、それだけ、ファッションに国民の関心が行くようになった。

第5共和国時代は、韓国の人々が自らの国家に自信をもち、外部へ積極的に発信していく時代でもあった。国際的にも、1981年9月に名古屋を退けてソウルが1988年オリンピック開催地に決定し、1981年11月には、バグダッドや平壤を退けて1986年のアジア競技大会をソウルで開催することが決定されるなど、自信をつけていった。とくに日本の都市を退けてソウルオリンピックに誘致を決めたことは民族意識を鼓舞した。

1981年はオリンピック誘致だけでなく、韓国から世界への人的交流増加を約束した年でもあった。1981年6月に発表された「海外旅行拡大方針」の政策によって、海外旅行制限が緩和され、人々が海外に向かう動きが盛んになった。これらの動きは、1970年代半ばから建設業が海外進出するのにもなった中東アジアへの出稼ぎに加え、ビジネスなどさまざまな面で海外に韓国の人々がでていく機会を増加させた。

1984年も、多くの人々に自信をもたらした年といえる。1984年には口

サンゼルスオリンピックが開かれたが、ここで韓国は6つの金メダルをとり、総合10位の成績を残した。これまで総メダル数が5つに満たなかったのに対し、スポーツ国家としても自信をつけ、その次の1988年ソウルオリンピックに期待を抱かせるに十分であった。折しも流行ったカラーテレビがこの活躍を放映することで効果もあがったと考えられる。1985年10月にIMF総会をソウルで開催したことも韓国を世界に知らしめる絶好の機会となった。そして1986年にアジア競技大会が開かれる。このアジア競技大会に向けて多くの人々が借りだされた。また、環境美化運動など、一大キャンペーンが繰り広げられた。この大会の成功を期に、韓国はますます世界に認知されるようになったのである。

これらのことから得た自信と期待は、ソウルオリンピックに向かった。1980年代前半からの動きであるが、1988年を記念した「88高速道路」が建設され、街角のあちこちに1988年を意味する「88」(パルパル)の文字が躍った。

ソウルでは市民生活も確実に向上し、韓国の首都として発展した。1983年には市内で地下鉄工事が相次ぎ、1984年には東京の山手線に相当する地下鉄2号線が開通し、1985年に地下鉄3号線、4号線が開通した。また上下水道の改善が図られ、衛生面でも向上した。

また、全斗煥は文化事業に取り組むポーズを国民にみせた。成否はともかく、その先鋒となったのが、韓国新聞協会が主催し、KBSとMBCの2大放送局が運営を任されて1981年5月に開催した「国風81」という国民イベントであった。そこでは生き生きした時代を創ろうというスローガンの下、さまざまな民俗行事や歌謡祭、演劇が繰り広げられた。

文化や娯楽としてのスポーツにも力が入れられた。1982年に体育教育とスポーツを全国に拡大させ、援助するために体育部が新設された。これはオリンピックなどをにらんでの政策である。このようなスポーツ奨励政策の一環として、1982年から韓国民俗シルム委員会が発足し、プロ化へとつながった。これに続いてプロ野球が1982年に発足し、プロサッカーリーグが1983年に発足したが、これらは人々の娯楽を広げる役目を果たした。

生活文化面の発展は、単に経済発展だけで得られた満足感以上のものを

人々にもたらした。1983年に発表された韓国ギャロップ調査研究所の調査結果によれば、63%の人々が中産階級に属すると答えている（鳥羽、1984: 163）。1980年代に入って一定した段階で、韓国の人々は豊かさを感じ始めていたのである。

対外的には韓国という国家が世界に認識される時期でもあった。歴史的な関係も深く、地理的に近い日本でも戦後の一時期は韓国に無関心であったり、なおかつ金大中事件などから否定的なイメージで捉えられがちであったが、1980年代になって認識が変わってくる。たとえば、それは1984年からNHKで「ハングル講座」が開設されたことにもあらわれる。これは折からの韓国ブームに押されてであったといわれるが、中身はともあれ、朴正熙政権から大きく対外イメージを変えたことは間違いない。その後のアジア競技大会とソウルオリンピックが、他国の注目を韓国に集める契機になったことはいうまでもない。

以上のことを鑑みたとき、第5共和国時代は韓国の世界に向かう新たな飛躍の時期であったといえる。

もちろん、以上の社会発展は指導者が全斗煥でなくても、成しえたことという指摘が考えられる。しかし、1970年代から1980年にかけても、韓国では北朝鮮の脅威が社会に広がっていた。事実、朴正熙が指導者として権力を掌握していたときにも、青瓦台襲撃事件などが起きたが、その後再び、朴正熙の死を期に新たな策動を始めたといわれる。北朝鮮によれば韓国の捏造ということになるが、ソウルの西で漢江をわたって武装スパイが進入したほか、浦項沖への武装したスパイ船が侵入したり、中部前線の非武装地帯を武装スパイが越えてきたことが韓国で報道された。1978年6月には、奇しくも全斗煥が北朝鮮スパイのトンネルを発見している。これらの事件は韓国の人々に恐怖を与えるのに十分であった。実際に1983年9月にソ連の大韓航空撃墜事件が起き、1983年10月に北朝鮮によるラングーン爆弾テロ事件が起こっている。当時の韓国において北朝鮮をはじめとする共産圏はまだ脅威の存在であり、決して楽観的な状況ではなかった。

さらに、1963年には3億7000万ドルにすぎなかった借金が、1980年には225億ドルに及ぶ巨額にふくれあがって残っていた。これらは実際に社

会不安となってあらわれており、とくに危険なのはそのまま社会不安が解決されないまま、人々の勤労意欲が喪失していくことであったといわれる。ポスト朴正熙の指導者選択は、大変に重要であった。

いくら指導者が人間的に完成していても、北からの脅威を前に軍部の統括すらできず、市民からのデモに迎合するばかりでは、社会不安を増幅させるだけであったことは想像に難くない。政権奪取が乱暴なやり方で行われ、たとえ自己の名誉欲に裏打ちされていたとしても、軍部をまとめた全斗煥が指導者になったことの意味は大きかった。当時の政治情勢まで考えたとき、強力な軍部を掌握している指導者が望ましかったともいえる。

朴正熙政権の財産を継承したといえば、それまでであるが、継承できなかった、つまり軍部を掌握できなかった崔圭夏や、それ以前の尹潽善(YUN, Bo-seon)の失敗をみたとき、継承すること自体が困難であったといえる。少なくとも全斗煥政権下において国家を揺るがすほどの大きな混乱はなかった。さらには、当時の軍人の中で、一時的にも後継者と目された金鐘泌(KIM, Jong-pil)や李厚洛、尹必鏞が権力を掌握していたとして、「国民の目をそらすため」と揶揄されるスポーツや映画振興といった文化路線に踏み切れたかは疑問である。

もちろん、全斗煥は軍事的エリートであったかもしれないが、決して政治家として優秀であったかはわからない。また政権掌握にいたる一連の事件や今日も紙面を賑わす大規模汚職事件をみたとき、国民に多大な犠牲を払わせたことも事実であり、決して望まれてでてきた指導者といえないかもしれない。しかし、それなりの役割を果たしたことを考えれば、相応の評価があってもよい。

後に軍部の中枢を占める一心会³⁾でもリーダーは全斗煥であり、部下が寒いといえ、自分は裸になっても上着を脱いでやることのできる人物であった。多くの命を奪い、多額の不正を行った罪は決して消えないが、一国の頂点に立つには、何らか秀でたところがあったからと考える。

6. 全斗煥は「悪人」か「悪役」か

最後に、「役」というものの自体の視点から考えてみたい。大きな社会の流

れのなかで、知らないうちに、ある「役」を演じさせられたり、ある「役」を演じることを期待されることは多い。人類学者のギアツが呈示した「劇場国家」とは、インドネシアにある小王国で王につく者が経済的・政治的支配を明確にしていなくてもかからず、その個人に王を演じることを社会から要請され、自らが王を演じる象徴的で劇的な儀礼を通じて、その存在を得ている状況を指している（ギアツ、1990）。

もちろん「劇場国家」のように、国家としての存在を得るために指導者である全斗煥が「役」を演じ、また人々から「役」を演じることを期待されたり、仕立てられたりしていたわけではない。しかし、全斗煥にもあらかじめ何らかの「役まわり」が周囲から期待されていたことはなかっただろうか。最後に、全斗煥についても「役まわり」という観点からみなおしてみたい。

1987年6月、全斗煥は自らの後継者として盧泰愚を大統領候補に指名した。しかし、その直後に大統領直接選挙を要求する大々的な民主化デモが起きた。結局、盧泰愚がそれを受け入れて「民主化宣言」を発表したことで支持が回復したが、この一連の行動を全斗煥の反対を押し切ったの苦渋の選択と仕立てたことがより効果的であった。しかし、実際には当事人士の合意のうえとも聞く。その意味で全斗煥は「役」を演じたといえる。全斗煥が「悪役」を買ってでたのである。

ただし、全斗煥の場合、その「役」を演じる素質まで兼ね備えていたといえる。独裁政権を維持するには資金がいる。そのための資金は結局財閥と癒着することで政治資金として上納させることになる。実は、これは同じく独裁政権であった朴正熙政権でも行われていたことである。しかし、朴正熙政権では賄賂といったかたちでの不正が行われなかったのに対し、全斗煥政権や続く盧泰愚政権では不正が行われた。何が異なったのだろうか。これは朴正熙の禁欲的な性格にも大いに関係するところであるが、それほど人間関係が朴正熙には少なく、全斗煥には多かったということである。朴正熙は孤独で、内向的な性格であったため、莫大な政治資金を資金としてそのまま保有できたが、全斗煥は交友関係の広さや、その人間性から断り切れない不正を働いたともみることができる。全斗煥は同じく原則

を突きつけるスタイルであっても朴正熙とは明らかに異なり、人物や状況によって差をつけた。それは融通をつける巧みさといえるが、同時に賄賂の温床ともなった。

人間関係の広さが逆に他からも「役」を期待されやすくしていたし、また自らも「役」を演じる「サービス精神」に富んでいたといえる。

一方、人々が全斗煥にある「役」を押しついたり、期待していたようにも思われる。とくに何かを「悪」に仕立てあげることで、ときに自らを「免罪」しようとする傾向はみられる。その対象にはまり込んでしまったのが、全斗煥であったといえる。つまり、社会に対する不満が生じた責任を人々がどこかに転嫁したい状況がすでにあり、折よくそれに適当とされる人物が現れたとき、その人物を「悪役」と仕立てて、その責任を「すべて」転嫁してしまうのである。それによって自らに「悪役」がまわってこない仕組みである。

人々は自らに都合の悪いことを誰かに投影して語りたがる。もちろん、全斗煥の行ってきた数々の「悪行」は決して許されるべきものでなく、それなりの法的処置が執られてしかるべきである。しかし、全斗煥のみを「悪役」に仕立てあげ、それで事足りるとすれば、それは全斗煥政権のために理不尽にも命を奪われた人々をのぞき、高度経済成長の恩恵を受けた多くの韓国の人々の罪状を無視したことになる。反発する人もいようが、全斗煥は責任を自ら被らなかつた4000万人を越える韓国の人々の身代わりでもあったともいえるのである。

ここで無力な個人に何ができたのかと逆に問い返されるかもしれない。しかし、そのような事態をつくりあげたのも大多数の人々の無関心であったとすれば、その罪状は一般の人々に向けられるといえる。「悪役」をつくりだすに相応しい社会的状況のなかに全斗煥は生きたのであり、またかたちを変えた現在のなかにも生き続けているのである。

このように考えたとき、決して隣国のことだけでなく、もっと私たちの身近にも同じような状況が渦巻いているように思われる。首相や経済担当省、そして官僚に責任が全くないわけではないが、彼らだけに責任を転嫁して自らがさも被害者のように振る舞っている自身の写影がみえてくるの

である。

人は個性とは別に、自分がおかれた境遇によって、状況において選択しなければならないことがある。以上のような状況下において、全斗煥がとってきた行動も、自身の意志にかかわらないところがあったと思われる。ただし、ここでみられたのは、先述した「劇場国家」のように何かを象徴する儀礼行為として演じることが期待されていたというより、より現実的な人々の免罪といったレベルで「役」を演じることが期待され、またそれに則って「役」が演じられたとはいえないか。

また少数派といえようが、全斗煥が任期を終え、退陣することを悲しんだ人々もいる。とくに利権に関わらない、個人所得を上げることに躍起にならなかった当時の女性や子供において聞かれた。それは「北からの恐怖」に対抗できる軍事力をもった指揮官としてのイメージからきた安心感によるものかもしれない。現代韓国の経済基盤ができた1970年代に対し、生活文化の基盤ができた1980年代であるが、当時のリーダーであった全斗煥の役柄の多さだけ、その時代の見方は分かれてくるといえそうである。

註

- 1) 全斗煥に関して、千金成の著作によれば10人兄妹の7番目で4男となるが、池東旭は5男と記している(池東旭、2002: 152)。他の記録でも兄弟の名前が異なったりするのは当時の戸籍がそれほど正確でなかったことによる。
- 2) ROTCとは学士将校ともいい、大学の在学中に、専攻の単位以外に軍事教育の単位をとり、そして通算で確か6カ月の実際の訓練を受け大学卒業後、更に訓練を受けて少尉になるという制度で、殆どのアメリカの大学はこの制度を取り入れている。
- 3) 一心会(ハナ会)とは、朴正熙政権下で慶尚道出身の陸士11期生が中心となってつくった私的組織で、徐々に勢力を拡大していった。一心(ハナ)には、祖国のために一つになろうという意味が込められている。後にこの一心会が軍部のなかで要職につき、12・12クーデターを成功に導くことになるが、この存在が一層韓国の地域差別感情を拡大させたといえる。

参考文献

千金成 [秋聖七記] (1981) 『人間・全斗煥』ハイライフ出版

- 池東旭(1988)『ソウルの日本語新聞は書く』草思社
池東旭(2002)『韓国大統領列伝』中央公論新社
クリフォード・ギアツ [小泉潤二訳] (1990)『ヌガラ』みすず書房
萩原遼(1986)『民主主義よ君のもとに 韓国全斗煥体制下の民衆』新日本出版社
鳥羽欽一郎(1984)『これからの韓国 全斗煥大統領と先進祖国政策』サイマル出版
会
梁官洙(1994)『韓国民主義運動の軌跡 1980～1992』柘植書房

付記

本論文の執筆にあたり、平成25年度神田外語大学研究助成を受けた。